

にんにくで町を活性化 青森県田子町

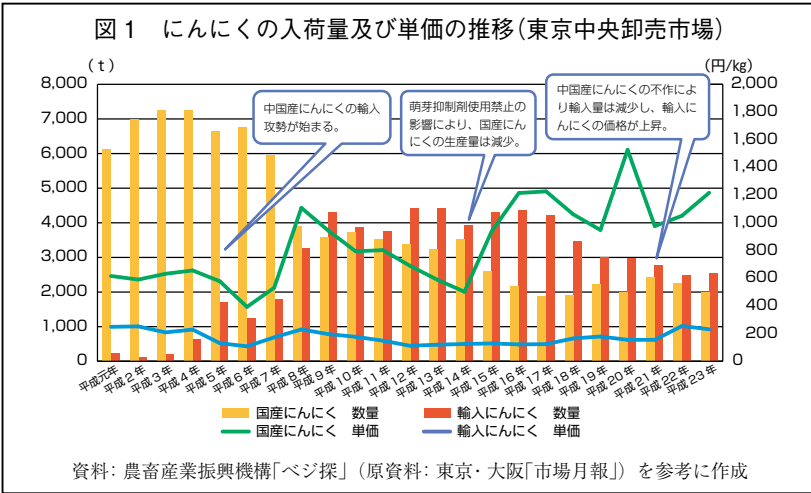
◆「にんにくの町」田子町

にんにくは、パスタや肉料理、炒めものの香りづけにかかせない野菜です。

この独特の香りの正体はアリシンという硫黄化合物の一種で、にんにくを刻むなどした際に酵素と反応して発生します。硫黄化合物には強い抗菌作用や抗酸化力があり、風邪の予防に効果があるともいわれています。

また、アリシンはビタミンB1と結合してアリチアミンとなり、ビタミンB1を効率よく吸収されるようにすることから、にんにくには疲労回復効果があるといわれています。

食の欧米化や健康志向の高まりから、にんにくは人気の高い食材です。



スーパー等で手軽に手に入るにんにく。国内市場で流通している半分以上が中国産ですが、実は、国内産にんにくの約7割は青森県

産です。中でも真っ白な粒とにんにく本来の香りを持つ青森県田子町産の「たっこにんにく」は、市場関係者から高く評価されています。



す作物を模索していた田子町農協青年部の有志13名が、福地ホワイト6片種(青森県福地村で栽培されていた福地在来に白色種を掛け合わせて作られた寒地系品種)の種球を約20a分購入し、新しい挑戦を始めたのがきっかけです。

田子町農協青年部では、昭和41年に約13kgを初出荷し、昭和45年3月に67名の農家でにんにく生産部会を設立しました。その後、優良系統の選抜を繰り返すとともに、「一人の生産では産地になれないがみんながまとまれば産地になれる」を合言葉に結束し、厳しい品質基準を作り上げました。

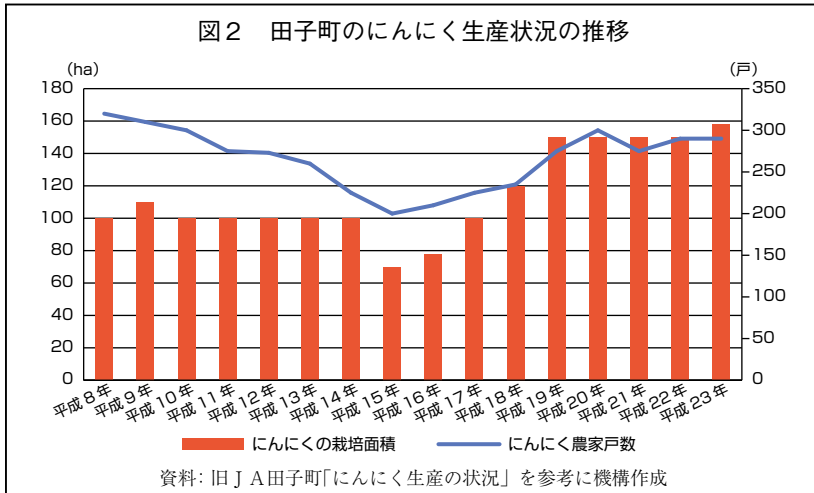
このような環境を変え、地域に現金収入をもたらす

質・数量ともににんにく日本一と掲載されました。作れば売れるにんにくパブルが到来し、20歳代で家を建てる若者も多かったのとことです。昭和59年には、約1,000戸ある農家のうち722戸がにんにく生産部会の会員になるなど、まさににんにくの町へと変貌を遂げました。

◆輸入にんにくへの対抗とブランド化

昭和53～54年にかけての米国産にんにくの輸入攻勢を乗り越え、昭和50年代後半に3億円だった販売額は、平成3年に8億円を突破し、田子町のにんにく生産農家は安定した経営基盤を築いたと思われました。

しかし、平成5年に中国産にんにくの輸入攻勢が始まり、安価な中国産にんにくの普及により国産にんにくの価格が大暴落した影響等から、にんにく生産部会



の会員は約200戸に落ち込み、栽培面積も約100haから一時は70ha程度に減少しました。

一方、田子町のにんにくは国産にんにくの価格が低下するなかでも、高値で取引されていたことから、市場にまがい物が出回るようになり、「たっこにんにく」

「ブランドの徹底管理の必要性が出てきました。」

このため、加工流通業者、生産農家等をメンバーに「たっこにんにくをもりあげる会」が発足。

平成18年に地域団体商標「たっこにんにく」を旧J A田子町が取得し、ブランド管理の土台が整いました。



イメージキャラクター「たっこ王子」

その後、中国産野菜の安全に対する不信や中国におけるにんにくの不作による価格高騰を受けて、国産にんにく価格も回復し、平成23年には、にんにく生産部会の会員数は約300戸、栽培面積は約150haに増加しています。(図2)

◆「たっこ王子」が大活躍

田子町経済課では、「たっこにんにく」の生産、販売の拡大を目的に、平成23年4月にたっこにんにく振興室を立ち上げました。



たっこにんにく振興室のみなさん

振興室の職員は、「たっこにんにく」の知名度を高めるために、イメージキャラクターの「たっこ王子」の着ぐるみを着て、テレビ等に出演しアピールしています。また、関係機関と連携し、病虫害に強い独自のウイルスフリーの品種を育成することにより、優良種球を生産者へ安く提供できつつあります。



にんにくが大好きな佐藤課長

◆「にんにくによる国際交流」

にんにくの町として一躍有名となった田子町は、昭和60年代から「にんにくシンポジウム」や「にんにくとべこまつり」を開催するなど、地域の特産をアピールする取り組みを始めました。

また、にんにくの生産、加工、集積の町として有名な米国のギルロイ市と昭和63年に姉妹都市となり、それぞれが開催しているガーリックフェスティバルにお



売店で販売されている加工品



にんにくをすりおろして食べる
特製「にんじゃあ麺」

じゃあ麺」等をレストランで提供するとともに、にんにくの加工品を売店で販売しています。また、にんにくを使ったレシピの開発等、情報発信にも取り組んでいます。

互いのガーリッククイーンを派遣したり、田子町の中高校生をギルロイ市へ短期留学させ、ギルロイ市より国際交流推進員を招き子供たちの英語教育を行うなど、町を元気にする交流を実施しています。

現在、ギルロイ市との国際交流以外に、イタリアのモンテチェリや韓国の瑞山（ソサン）市といったにんにくの産地とも新たに交流を始めています。

このような国際交流や田子町のにんにく産業の振興を目的として、平成5年に田子町、JA、商工会議所の第三セクターとして(財)田子町にんにく国際交流協会が設立され、ガーリックセンターを拠点として活動を始めました。



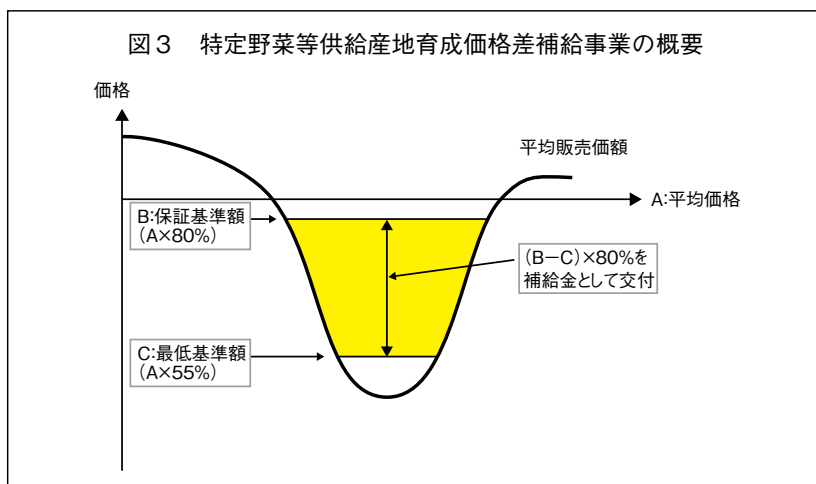
情報発信の拠点ガーリックセンター

（特定野菜）として位置づけられています。

（独農畜産業振興機構では、このような野菜を生産する農家の経営安定により、国民への安定供給を確保するため、天候等の影響により価格が著しく低落した場合に、その一部を

特定野菜等供給産地育成価格差補給事業

にんにく、ブロッコリー、かぼちゃ等35品目は、地域農業振興上の重要性等から、指定野菜（全国的に流通し、特に消費量が多く重要な野菜）に準ずる重要な野菜



助成する特定野菜等供給産地育成価格差補給事業を実施しています。

田子町のにんにくについても、平成13年度に輸入物の増加により価格が急落した際、同事業が実施されました。